小笠原島紀事

卷之拾二

十四

W243
9

昌和漢
門
一七七番
一號
共三三冊

陸軍文庫
和
第一五三五番一
共二十三冊

W243
9

陸軍文庫
帝國圖書館藏書

小笠原島紀叉卷之十二

目錄

○七月三日佛公使小笠原島ハ日本輿地圖ニ所見ナシ
因テ經緯度詳細ノ圖且ツ武鑑譯訳請求ノ来翰
○同晋翰写
○同四日英公使ヨリ最前所贈ノ小笠原島規則蘭文訳
請求ノ来翰
○同晋翰写
○同十七日字本国ヘ向柘報知ノ晋翰亜公使ヘ委托贈
達ノ報告及ヒ逓送料請求之来翰
○同逓送料収領晋
○同日仏公使ヘ過日彼ヨリ小笠原島地図請求ノ来翰

51. 8. 24
1080284

二回答ノ草案

○同二十一日仏公使小笠原島支件ニ就テ閣老ニ面晤ヲ請フ来翰

○同二十二日仏公使ヘ面晤ノ日時ヲ定メシ回翰

○同二十七日仏公使兼テ約束ノ如ク此ノ日板倉防州カ邸ニ面晤小笠原島来由ヲ説ク公使再ヒ規則書ヲ請フ

○同日洋暦第七月二十五日附十八号回翰二十二号ノ回答并ニ彼カ請求ニ随ヒ書面飜訳英文ヲ蘭文ニ直シ之ヲ遍与スルノ回答

○同二十六日忠徳常純カ小笠原嶋巡視ノ賞典ヲ行ハル

八月三日右回翰随行并ニ軍艦方等ヘ賞典

○同五日去月二十七日勝静カ邸ニテ仏公使ト對話ノ時約セシ港規則ヲ本日外国奉行一名ノ添書ヲ以テ贈遣

○同書翰

○港規則

○同七日勘定奉行ヨリ並山縣令カ属吏小笠原島ヘ差遣ス旨之申稟

○右縣令カ属吏八丈島民ノ内移住説諭注視崖略書

○同移民ヘ賜品目録

○同十五日縣令属吏ハ八丈島ニ残リ移民ヲ外国方ヘ交付ノ覚書

○移民ノ内選挙注視并ニ手当金授与ヲノ注視書

○同二十六日朝陽艦再ヒ小笠原島ニ入港外国方監察方医師及ヒ移民男十五人女十五人共ニ出稼ノ大工五人木挽一人鍛冶職一人乗組着島

○同二十七日去月二十七日亜墨記官ヘ前ニ寄国政府ヘ墨簡遞達ノ費用授与ノ申稟

○同墨鞠案

○同八月（月附不詳）田中廉太郎ヨリ移民居小屋造立及ニ井戸新堀オヲ始メ遠方地所新墾ハ昔見合北袋沢一円伐開南袋沢起返地味的当ニ諸品植殖食料ノ余分ハ勿論今般種殖之果物生熟セハ外国人ヘ貿易一件或ハ芭蕉布織立オノ業ヲ開キ総テ移民共懶惰不取締ヲ戒メ又タ植付ノ蕃薯ニテ焼酎醸製及ヒ食塩ヲ焚カセ鰲ハ甲ノ佳品ナルハ江府ニ搬運シ其肉ハ油ニ製スヘキ較計其ノ他魚油ノ製方ノ詮議女子ハ相應手業童男女者芭蕉布ノ絲績ヲ教ヘ男女老幼ニ至ルマテ閑居ナカラシムヘキ旨教件ノ下知ヲ傳達ノ覚

○阿部將翁教種ノ草木果物菜蔬及ヒ茶種オヲ携来植殖ノ較計

○同四日在民「セームス」病ニ因リ出島地国ヘ移住ニ就テ其ノ所有ノ諸品政府ノ買上ヲ懇願

○同人願書

○同月（日附不詳）田中廉太郎母島ヘ渡航同島在民マツシヘ對談シ其他ノ便利ヲ計リ移民ヲ引分ケ渡サン旨ヲ

決議シ出帆迄レトモ先父島一所開墾ノ交切立ヲ後
ト姑ク此支ヲ止ム
○同十四日中浜万次郎君沢秋船ヘ乗鯨漁ヲ先務トシ
閑暇ハ通年ヲモ兼役シ且ツ捕鯨ノ方術ヲ移民オヘ
傳達サセン支ヲ兼テ上申ノトコロ本日許可
○右受書
○就右支件莚山縣令ヨリ勘定所ヘ伺書
○君沢船ハ小秋ニシテ捕鯨不便利因テ別段捕鯨適亘
ノ船雇人ノ申稟
○同九月九日小笠原島五箇ノ官吏議ニテ移民使役ノ
方法ヲ定ム
○右議定書

○仝月二十八日先是莚山縣令ヨリ中浜万次郎小笠原
島捕鯨一条ニ付越後村柏浜平野廉藏船乗用ニ付数
件之申稟有之本日指令
○右申稟書
○同指令
○同月中朝陽艦小笠原島ニ滞泊病テ船中ニ死亡ノ水
主五名各円所奥村谷川ノ奥先前死者葬地ニ埋葬
○十月九日五島官吏検地シテ移民ヘ畑地ヲ分与
○右坪数書
○同二十六日兼テ小笠原島ヘ滞泊ノ魯船指揮役ヨリ
其ノ船ノ水夫脱走ノ報知及ヒ島中警非違ノ諸吏ニ
捕縛依頼及ヒ病者上陸加療許可ヲ請フノ旨在島ノ

官吏ヘ来鞠

○就右小花作之助ヨリ両条願允ノ返鞠

○同二十九日在民コルソンス居宅ヨリ奥村ノ方隣浜ノ地ヲ官吏検地シテ貸与ヘ開墾ヲ許客ス

○右拝借証書

○十一月十九日先是中浜万次郎鯨漁中心得ノ稟議ヲ呈セシニ本日稟維

○右指令

○文久三年ノ上

○正月七日小笠原島出張両局官吏等議シテ移民及ヒ出稼職人等ノ休暇ヲ改定ス

○同九日平野船小笠原島ヘ着港中浜万次郎捕鯨主宰松浪権之丞林和一郎等移民捕鯨修業トシテ乗組同所出帆島島ヘ至リ日本属島ノ札ヲ建

○仝札図

○仝二十一日去年十月五日於小笠原島在民キレリー暗殺セラレ其殺害人探索ヲ命シ数回促セトモ因循有無ヲ不告因テ本日平野船一同救出糺明ス

○同島民稟状

○三月九日亜国鯨漁船ノ水夫脱走船長捕縛ヲ小笠原島在廳吏ヘ依頼

○仝書鞠

○仝月日不詳亜国鯨漁船脱走水夫三名小笠原島官廳ニ自訴ス其実士官オノ苛酷ニ出法ヲ敢ルハ不軽ト雖

皇国ニ對シ有罪ナラテハ規則書ヲ読聞セ請旨ヲ為サシム

○仝請旨

○五月朔日平野船小笠原島退帆松浪惟之亟林和一郎亜人スレス及ヒホーワンヒ名ヲ召連帰府（罪人一件別冊ニ詳ナレハキ此載セス）

○仝九日朝陽艦三度小笠原島入港在島諸吏及ヒ移民等引拂ノ下知達来

○諸吏退散ノ崖略

○官宅及ヒ諸品諸船残穀等島民ヘ領与

○種殖ノ草木美品等培養ヲ島民ニ遺托

○廳舍ノ蹟ヲルーイスレワンーニ托ス

○同人保状

○島民等ヘ投与スル所ノ家屋及ヒ諸品并ニ諸船等收受且ツ向後小笠原島ニテ困難ノ日本人ハ便船有之迫快助スヘシ將タ開墾碑及ヒ冥福碑ノ両碑并ニ墓地等大切ニ守護スヘキヨシノ請書

○セームスマワレレ出島ノ時所有ノ諸品御買上ヲ申稟ノ横文原文交還

○同訳文

○移民開拓地ハ千余坪ヲ在島外国人ニ委托

○同十三日朝陽艦小笠原島出帆在勤諸吏及ヒ移民一同引拂

○同十九日朝陽艦品川海帰港諸吏帰府

○七月日時不詳菊池伊豫守上申ニテ小花作之助益田鷹之助松浪権之丞及ヒ医師阿部将翁カ賞典ヲ請フ

○同上申

○阿部将翁賞典之上申

○十一月日時不詳竹内下野守菊地伊豫守連署ニテ小笠原島開拓費用残金返納ノ申稟

此冒中ニ小笠原島冒藉悉皆焼失ノ事ヲ詳ニ載セタリ

○同十五日江城本丸北隅ヨリ出火柳営焼亡此時小笠原島事件冒類悉皆灰炉ニ属ス

○元治元年

○月日未詳外国奉行連署ニテ小笠原島向后ノ處分上申

此冒未文惜ムヘシ結弓未詳

小笠原島紀畧巻之十二

同文久二年七月三日仏国公使昏朝ヲ進出シ小笠原島ヲ載セシ　皇国輿地図ノ所見ナシ因テ経緯度ヲ明細ニ昏載スル所ノ地図及ヒ従前制禁ノ諸本且ツ武鑑ホノ飜訳許可ヲ請求ス

千八百六十二年第七月二十八日　亦六月廿一日　江戸

亦国事勢宰相台下ニ呈ス

余小笠原と名使久ろ爲の事を施とる書簡を展ずせり其書中ニ此爲ハ日本国の南方となり此爲の名ハ余の所指ところ日本地図上ニ見ヘシ且ツ台下の書翰中ニ経緯度を示さ[illegible]為ハ余此告知を公ハ採り用ひ得る旁余ハ存意を述ヘ及ひ其旨趣を国ヘさるを情に我政府

より出に是の設備を余に向ふなるべし

台下より此書の回答を給ふを直に此事件の回答を送る べし

余は交台下に請ふ余が日本所領の国或は島の様神田なる書状を給ふべし其方を若し我国の商船或は軍艦日本の不領する事明ならざる地に上陸を許尚て限制を避らんが為めなり

台下余が貴国の経綸交を結しく施たる地図を給らい

已に余が与へる台下の求めに応じ此地図及び書

類の譯を貴国武鑑の譯と為さを是迄の様子禁せに

及び政府の譯者の外きに国人陸に役所の等

を助くる私用の通弁者を妨くるおと書き成為預を位

し此望を其政府へ此国の様子を書き給るべき人を是

改罪ヒヨリしロ本使節は此国に行るデブロマチーク

使節の様子に決して重を見るおとなし故にデブロ

マチーク使節も我国にて日本使節に許し多るめく

学問のため本国の様自由を問をしむるおと要用なり其

方い貴国に於て良き学生を育たる為ふ通弁者を使用

せる程い西洋諸国と日本と殊ひ多く條約の意味より

生じたるなり為性設な

日本立留佛蘭西合橋ミニストル

トゼントヘルクル手記

フシツキマミ訳

同四日過日所贈達ノ小笠原島規則ノ変ニ就テ英公使ヨリ左ノ書翰来ル

第二十二号

千八百六十二年第七月二十八日（我六月十三日）横浜ニテ

書ハ

外国事務執政台下ニ呈ス

余僅カニ十六ヶ月（我六月十一日）空人島ノ事ヲ載タル貴簡ヲ接受セリ此書中ニ此嶋ノ港ヲ貿易場ノ規例ヲ定メタリ然ルニ其後ノ報ニ載タル事ヲ第ノ解ヲ去ラサルヲ見テ英吉利文ヲ解セサル人ノ飜訳シタモノナリカ台下ニ呈シタルトキハ日本文ヲ和蘭文ノ飜訳シテ第ノ結ヲ陪セン甚愉快ナラン

又ハ此島ノ事ヲ載タル第七月二十五日（我六月十四日）附第十八号ヲ第ノ公書ノ回答ヲ結ヲ陪セン事ヲ請ス恐惶敬

白

不列顛女王殿下ノチャルデタッフエールス

イレントラヨンニール手記

日本五箇条書翻訳

ユル、エウステン訳

右十七日過日亜国公使館ニ托シ李国政府ヘ小笠原島開拓報知ノ書翰ヲ贈達セシヲ周旋シ速ニ遞送ノ報告及ヒ遞送料ノ返弁ヲ請フ旨書記官ヨリノ書翰来ル其ノ書左ノ如シ

千八百六十二年第八月十二日（我七月十七日）日本江戸合

英国使臣殿ニテ書ス

江戸ノ国ヲ近ク水野能登守ノ所領ニ至ル陛下ニ至ル
二三日以来ヲ国政府ノ小笠原島一件ヲ為ス一書ヲ
ルリン地ノ外国事務ニ送ストルレ送ルノ国旗ヲ為ス人
ヲ為メ余之ヲ陛下ニ呈ス陛下ニ呈ス且ツ余陛下ハ答ヘテ
之ヲ受ケ入ルヘシト約諾セリ
迅速ニシテ且ツ簡略ナル国旗ヲ御ヲシテ為メ余横濱
ヲ以テ彼ラ此事ヲ為ス又ハ此国飛脚賃為ノ新法出
テ政府ヲ以テモ此法例ニ倣ヒ小為ニ為サルヲ陛意セリ
為ハ余此書状貨メキトコトルラル十四何四十セント
の高ヲ拂ヘリ
余此書中ハ其信及書ヲ為ス陛下ニ陛下ノ代人ヨ
リ此高ヲ余ハ返済シ陛ヲ拂ヒ為サルヨリ為ス
アル、ヒ、ポルトメン手記
ヘルリン地名ヘ迅速ハ送ラヘキ状貨十四トルラル四十
セントの言ヲアル、セ、ポルトメレ氏より信及者ヲ
千八百六十二年弟八月九日横濱ニテ
飛脚屋信人
マルチン印

ホルトメンヨリ前ノ書簡到来ス因テ過日仏国公使ヨリ
小笠原島ハ　皇国輿地図ニ所見ナキヲ以テ経緯度等精
密ナル繪図請求ノ来翰ニ答フル文左ノ如シ

佛　蒙　西　亜　楼　ニ　ス　ト　ル

小笠原嶋緯度経度分を事に付被差越候　英国第七月二
十八日　我六月九日　附の通報を以て小笠原嶋を
一名望人嶋西海那唱フロリヒスヘフィレスと称し北緯
二十六度三十二度より二十七度二十五分英国東経一
百四十二度六分より二十分の間に位置する嶋と称し其
位置は我国地図上に於ては中越さきしい生ち
名称と云るものゝ書を以地図上に記載し古き市中売買
に用ひる図にて和に刊行をしたるものなれども其の写見の
ふ変を他とし所其図に載るふと不能して僅に八丈嶋
の傍に位して以より南に方りて嶋あるよしを記載せ

トセンテベレリルレ

エキセルレンシー

しかる上は他市中売の地図数多有るとも絶嶋まるを氣
海の地に至りては彼に詳にして此に異なるそのふ歩
元より我国領内の風習が国の天へ示に入き者に有り
ねを生徒に通ずしに通じ外国人より地図を求免らる
ものなれを以能まる事なのに外国の地図
及び活版の減深図国と度裏経緯の変程等詳審し是を
梓に鏤めんとの目論見あれども事故なりし上を以て差
示也へ　小笠原島を今般水路発出初巡検ら砲番し
く測量をしめしかれも不日是を梓に彫の中が一般に
公示をんと出る所を第一本を編る迄まる又不て了解
般般交武鑑の欧国より紫極に迄きに有ようれも巨細
明示おまひ交と存ぜをとも百寮書司の点多かる持般

係遷の頻数なる日本換り月日改まれも一概に保明し
がたし尤諸侯の紀元に警衛拵場本を委曲を送り者与
供の者すら全せし百已に了知致さしし事とおもひる
將軍諸侯不足の儀に付ては中戦をしたる古式ホおひて
も公私の用使左ホ義支多りれむ其筋の者一般に中生
生徒教養為りされ先漢洋学業効能の上ハ仮用月五色
得るホ至るへし山陵四季中へ変相生備言

文久二戌年月日

服部中務大輔
小野和泉守
板倉周防守

此書亦タ書簡取扱に載セス若未遣中次に載スル応
樽に済シ欧又ハ此頃小笠原島務ハ南島掛ニテ司リ

旧記奥ノ島有トナレハ今詳ニスルニ所有ナケレハ
姑ク之ヲ省

同二十一日仏国公使左ノ書ヲ送リテ面晤ヲ請フ是小笠
原島変件ニ因テ也

千八百六十二年第八月十四日江戸仏蘭西使臣敬
白

外国事務宰相台下ニ呈ス
余謹テ台下と何れの日会合をへきやを知せ給ふ
を外国事務宰相台下に永と願へし

佛蘭西全權ミニストル
トセンデヘルクル年記

ウエイラエイ訳

同二十二日仏蘭西公使ニ面晤ノ日時ヲ定メ回答ス其ノ
文左ノ如シ

佛蘭西全権ヨリ
エキセルシエ
トゼヒデヘシ
ルカ

貴國第八月十四日附ノ書簡確手セリ我モ亦二十七日
八ツ時第七月ハ月ニ十三日ノ夕方ニ
ヨリ面会ヲ以テ閣下ヲ外国ヘ来訪
ス

文久二年戌七月廿二日

駐坂中警大佛花押
小野和泉守花押
坂蘭閣下花押

同二十七日周防守板倉勝静邸ヘ閣老列席仏国公使ト面
會シ小笠原島来由詳ニ演述ス公使氷解シ他日円島規則
ヲ設ケセラレンヿヲ請フ閣老義誼畢テ退引ス同日英国
公使ヘ閣老連署ノ書翰ヲ以テ洋暦第七月二十五日皇暦六月
十日同第七月二十八日我六月三日両度ノ来翰ニ答回ス

貌利太亜ヒヤルセダツヘール兼コンヒユ
ルセネラール
エキセルレンヒー
イヒントヒコンニールカ

貴國第七月二十五日附十八号同二十八日附二十二
号の書簡確手致下拙翰頒手せ且一体貴を称呼と小笠
原嶋の儀称小〜て三辺嶋ともカ含せ称ひる事カ者を
且つ直ちに船中の欠乏品を給へ給与せ〜と計れる且也

素より自在に交通の御始末に付ては、同時へ
差遣し、其外国事務掛を以て取極め、書面先方へ遣し、かと
反復の英文翻解致に付、則案文を以て差遣し、仏名を
以て了解致之事と存ん、右に付の通書如形に相違候
言

文久二年戌七月廿二日

服部帰一　水野筑後守
坂本中務大輔　水野和泉守
松倉周防守

同二十六日今年三月小笠原島より帰府に付り忠徳常
純に賞典を行ハル

外国奉行

金十五枚
時服四

金十枚
時服二

小笠原嶋は南海孤島にて被下之
右英蕃商に於て国老列座周防守勝静演達参政待坐ス
同八月三日小笠原島より帰府ノ布衣以下及ト拝謁以下
ノ諸史へ賞与ヲ行ハル

水野筑後守

服部帰一

銀二十枚

金二枚
時服二

小十人
賛善五工門組
海軍艦和出役
浅羽早次郎

小十人
同軍艦頭取
小野支五郎

金三枚
時服二

同

金五枚

金拾枚

小笠原嶋開拓為用取調方ニ付ミ下之

佐藤用付

佐藤五郎

右於古筆部屋縁類図老列坐勝静演達参政侍坐ス

徒目付ハ焼火ノ間ニ於テ演達先例ナルヲ此席ニ出ス

ハ特格ニヤ本書ノ侭ニ載ス

外国奉行支配調役

由比左五左衛門

時勘定

深山宇平太

外国奉行支配調役並

田邊左一

五年被下品記載

小笠原嶋拾名ヲ外測量ニ後格別骨折ニ付被下之

時同見持拾

冨士見丸

時宮芳丸

時軍艦組

小野友五郎

右於同席再ヒ呼出シ勝静演達参政出雲守堀之敏侍坐ス

銀三拾枚

鈴木琢之助

時奇医師

恵畝徳領

金二枚

小野苓菴

冨士見丸

時宮芳丸

時軍艦組

銀二拾枚　　喰代和三郎

小笠原嶋ヲ始開発致ス者ニ付被下之

右於鄰躅間参政出坐遠江守加納久徴演達ス

金拾五両　　冨田達三

（外ニ金弾ヲ砲書始ヲ開出役）

金拾両　　須藤誅一郎

同

（江川太郎左衛門ヲ以テ砲術手附兼帯役被仰付）

金拾五両　　中濱万次郎

（戸田采女正家来　宗体養子　浦賀奉行同役勤）

銀三拾枚　　宮本元通

小笠原嶋ヲ始開発致ス者ニ付被下之

右於檜間同断人演達ス

同日勝静同明奥山金阿弥ヲ以テ左ノ書二通ヲ軍艦奉行

ヘ遍与ス

幕府軍艦奉行ヘ

銀五拾枚　　幕府軍艦組　　榮一

同　　塚本桂輔

銀三拾枚　　近藤徳吉

同　　松岡盤吉

銀二枚　　高橋栄司
同　　豊田清
銀三枚　　板浦金次郎
清軍艦乃下役

銀七枚
右之者共小笠原嗚呼島ヘ為出張致候ニ付出褒美
として書面之通被下置旨其庁の被申渡
戌八月

銀七枚　　塚本桂蔵
銀五枚　　竹岡盤吉
清軍艦乃引ヘ

同
右之者共小笠原嗚呼島ヘ為出張致候ニ付出褒美
として書面之通被下置旨其庁の被申渡
戌八月

同九日先月二十七日勝静カ郎ニ於テ仏蘭公使面晤ノト
キ小笠原島ニテ忠徳常純等カ極メシ所ノ規則昏ヲ後日
遍与セシ旨ヲ約ス因テ日本外国奉行伊豫守菊池隆吉一
名ノ昏鞠ヲ以テ規則書ヲ送ル其書左ノ如シ
其時港規則ノミヲ贈リ島規則ハ贈ラサルヒニヤ小
花権典支カ筆記中ニ所載港規則ノミナシハ姑ク抛之
仏蘭西全権ミニストル

以書翰申入候ハ、此節我が国事務執政對話と称し彼申立に
応じ小笠原嶋規則書写拙者より為差遣候旨彼申
候趣を以別紙差進し相見候言
文久二年戌八月十日　菊池伊豫守

小笠原嶋港規則

一　諸国商船漁船等港内へ碇泊し帰港日数名船員船長と名称数乗組人数を以届出日数迄碇泊
へ申立都て旦役人と差図に従ふ事
一　諸国と船と出入港と船税免と稼出入と商売いふな
差出す事

一　港内船泊と船と衝突に効あるとをつてふ可、発砲
致事
一　港内出入と船と水先案内ら者へ定と賃銀の掛事
一　港内碇泊と船と乗組と者上陸と上陸猟一田畑と荒
し致ふ法の者あるを召捕其船の船長へ厳お尚
と追料ある差出事
一　乗組人と内商人左右一或を一時停立に成を預
小屋の内ふ其船長へ申立役人と差図に従小事
一　従来の船役り立去れ立島と外国人と内断し事
右之條々文久二戌正月於小笠原嶋小野筑後守殿
帰一定之屋の地
本年九月二十二日仏始ノ各国之規則昏ノ達と今後

規則書ヲ贈ルハ何等ノ訳ニヤ詳ナラス

同七日江川太郎左エ門手附手代共小笠原島ヘ航海ニ付
豊後守小栗忠順左ノ旨ヲ達達ス然シニ各人丈ニ残リ移
民ヲ外国方ヘ交付ス
江川太郎左エ門手附手代共小笠原島
ヘ出張申立ル書付

小笠原嶋ヘハ人丈嶋民引移ハ国用トシテ外国奉行ハ用
附支配向是ハ代官江川太郎左衛門手附手代共航陽
丸ハ船ヘ乗組人丈為ハ蒸気仕掛蒸船ハ嶋最寄ニ碇泊
船繋場ヲ定ニ付移民申渡中航陽丸ハ船一ト先申渡り
後シ出帆ヲ迎ニ碇泊ヲ互能会見計高又乗組仕候

リニ有之ニ付為ハ航陽丸出帆ヲ迎ル御門手附手
代共ハ人丈嶋移民申渡ヲ掛ル外国奉行ハ用附
ヲ配向ニ者一同後小笠原嶋ハ一ツ家ヲ拵ヘ以て
宇宙国附嶋ニ御伺向一見ニて田嶋ヲ殺ル構ヲ計
ヲ彼作後ハニ付其区申後ヲ以て移民今般小
笠原嶋ニ渡左エ門文配所ニ彼作付ハニ付ヲ品
ヲ取調ヲ有之ハニ付右手附手代共彼地ヘ着後ハ嶋
ニ撰株一見ヲ仕交ヲ左エ門申立ヲ聞ヲ御ヲ聞
ヘハ写ヲ御船ニヲ一日小笠原嶋ヘ彼着ヲ保証ヲ嶋ヲ
モ田嶋ヲ仕ハ力ヲ有ヲ有ハニ付航陽丸ハ船ハ人丈嶋取ヲ
ヲ昇ヲ人ヘ拵一ヲ区番細ヲ品ヲ工つより手附手代共ハ
中ヲハ株ヲ取計ヲ中ヲ為ハ仕候ヲ式為中ヲ仕ハ以上

戊八月

同時太郎左工門ノ屬吏八丈嶋ニテ移民ヲ説諭スルノ概

畧

八丈嶋從人一同ノ家族和中作ノ口上大意

此八丈島より凡そ百八十里程已と方に商り小笠原嶋
と申処此度は開ハ為人ハ此に付人の姓名をハ丈嶋
の引渡の為計当彼作出に百男於也人女於也人何をも
吏風をこて小笠原嶋へ引渡ハ此お撰と申立見撰
と預りはひもの二ハ内多商として為我書付の通人あ
彼下と彼嶋へ為渡ハ後に移田畑切ふき植付に米麦を
多分に為米及物織立も出来に迚に上より米書味噌等
他ものと長物ハ句備為小笠原の仕筈を迚も 彼下定働方

ニ此方ニ為ハ有ハ婦女等も彼下ニ上嶋人の屋敷
とお為度との世より神代ニ人を被数の中左程に付
異加と程難有お祭へ人物百姓のとお撰との中海人
等ハ此内へ加へ難ク九とへよめをそゝひハ多ク
兼て様と貧ク きゝの為りとも人物まろ〳〵ハ兼
て夫婦ハお為な様と色もあり是をひの通保せ百ク
の中若ク男子を連て引移り度ものをめ可せ不為来
女子を撰む〳〵女子を連て引移り度ものハ是又めの
足をの中男子をとゝひ度の為通に大工左衛門磯ず
お心得にゝの十人出稼と〳〵て此度百迚の中に男人物
お撰の中立右一日ハ内多商何程頂載度為孔〳〵の
中立ハ

右等の儀は兼ねて公役より蒸気船法差掟に於
於ては時役人共一同厚く義定仕り通り撰方
いたし一所申何者も此蒸気船にて時日通出線のものを
迚てかの時船を以て時差協このおかに小蒸気時こい
に表より役こ被差遣事は安心いたし
川稼りに撰こ加足いたしの へこの中間に
戌七月

別紙

白河内木孫　壱反
杉坂稿男物　壱反
同　所　女物　壱反
小　篤　帯　壱筋

金　五　両

福民男女子供迚壱人別に書面之通被下之

同十五日太郎左工門屬吏ヨリ外国方へ移民ヲ引渡ス

覚

伊豆国伊ハ丈島之内
大賀右姓　孫　助　三十二才
世房　み　三十五才
右姓　典　佐吉　四十六才
世房

農間漁事稼出来

前日所
後日有御なれば五人の子供を
川逆八丈嶋に流遠代りいとこ
共通書

前日所
後日有御てつ後両人と子供を
川逆家日所代りあるとゝ云ふ
共通此書

三根村
百姓
女房
未吉村
百姓
女房
伴

四郎兵衛
三郎助
三郎左衛門
四郎兵衛
五郎七
四郎兵衛

藤九郎
三十二才
三十才
三十五才
四十五才
五十四才
四十六才

重て
出き

娘
百姓
女房
娘
伴
娘

四郎
十四才
ふく
十六才
松
四十一才
寿
三十五才
の
十三才
松
九才
子
女房

重て
出き

百姓
女房

三郎
二十七才
八
二十五才
ん

右松へ
あづけ

四郎へ
あづけ

農号大工與事孫出素

勇吹へめあるも

性

立村

る姓　廿分　る姓　廿分　廿分　る姓

源　脾　侍　侍　と　と

吉郎　四十七才　く　四十才　次郎　二十一才　ち　十三才　吉　三十一才　ゆ　三十才　れ　八才　へ

農向與事孫髮結の事

金ばかりなり男子八丈へ球金に越中ゐる

る姓　廿分　脾　源

金　九才　れ　三十二才　ば　三十三才　き　十二才　ば　十三才　わ　勇　五才　ゆ

侍ばへ

古くより出孫の者

大工

同

かじ方

大翼村

る姓

助　三十六才　ば

半　右衛門　二十八才　つ

庄　五郎　五十一才

木橋仙

大工

日

忠吉 三十五才

三根村百姓

與八 四十才

新松 三十六才

八丈島村小嶋ノ内宇坪丈村年寄 由蔵弟

小次郎門 三十五才

蒼井村百姓

民五郎 三十八才

メ人数三十八人

右ハ丈島出百姓預人数ニ内より今般小笠原嶋ヘ市

引移ニ付取扱民兵ニ出張ニ付共書面ニ連印仕候

上

戌八月十五日

分國方

牧田晋神

内目付方

原又吉

覚

江川太郎左衛門手代

川崎俊平

江川太郎左衛門手代

上井村善平

大業村　孫助
三根村　重左衛
末吉村　與七
中之村　三八
桂立村　傳吉

右之者共頂実ニテ善働者ニ付地役人方ヘ申出ル
一出稼人ニ付一日一人銀三匁七分五厘ツヽ食料ニ於
ハ拾匁宛下ル旨ニ付拾八匁為金五両ツヽ相渡ス
ハ拾匁宛田吾輔より申受ル也ハ仕事ハ為ノ節ハ
右除金ハ不受取ル姓ハ勿論服方ニも必得所五ハ拾
申出ル

月二十六日朝陽艦再ヒ小笠原島ヘ着港外国奉行支配調
役田中廉太郎定役秋田晋輔同心金坂貴之助徒目付冨永
一造小人目付原又吉医師阿部将翁来組渡島八丈嶋ヘ立
寄移民男十五人女十五人大工五人木挽一人鍛冶職一人
ヲ連来ル

月二十七日去月十七日小笠原島開拓支件ヲ孛国政府ヘ
報知ノ書翰送達費用ホルトメン申立ノ旨意評議ヲ遂ケ本
日外国奉行連署ノ旨ヲ以テ閣老ヘ呈ス
亜国書記官より差出ハ書翰之義ニ付
申上ル書付
仏国市国立合没ニ
付取扱ル

今般小笠原島市民相願ひ候に付字漏生政府より市書
御面倒亜国公使へ市相お願ひ御写を亜国書記官
より申出に一件字漏生政府へ市書籍等を給て亜国
政へ市相お渡に儀ハ字漏生国条約取結之節亜国前任
公使ハルリス様方周旋仕ハより字漏生不要保仕ハ事
件ハ於て亜国へ市相お願ハ節に付是迄之廉ハ書籍面
対出費等之儀と存候彼是申出ハ事も堂と ハ将共右等も
本国軍艦之便等にて商便之時世ハ有之儀と存候ニ而右之
ハ方お相ハとて既に右様申出ハ上ハ式方より市
候ニ付ハ以ハ方ハ亜も右之写数等存ハ尤も申出
方ハ小笠原島ハ周相ハ国之保銀と内より仕相別紙
之通伊豫守より通御差出ハ様ニ仕度尚之来籍諸

文通御渡ハ相ハ以上

村垣淡路守
津田近江守
竹本隼人正
一色山城守
田沢對馬守
菊地伯耆守

別紙

亜米利加合衆国使臣敬書加当
エスリワイル
アルセボルトメン江
貴国并八月十二日付を以て承仕候国王陛下様守

ヘ義遂ラレ一書翰蒸を先日我が国事務執政より字廟
生政府ヘと書翰面力を許国施政政一名義出仍並字定
し形状要く謝れる為こと右状質と一てメキシコトル
うん十四枚四十セントを許を許より構被是一由こて
彩脚世話人エルチンを受取書を添申出られし即を数
えめく返完おまひい写蒸を被政交ハ下総寄特成ニ付
以ち数答おまひ下偉を

文久二年戊八月三十日　菊地伊豫守

稟状ノ通指令清ニ因テ同三十日此ノ書翰ヲ達ス
本文ホルトメンヘ所托ノ字国政府ヘノ書翰案書留ナ
キハ前ニ云フ如ク梅スルニ前ニ載セシ忠徳常紀カ稟
議ノ書ニ添ヘシ亜国公使ヘノ書翰同文ナルヘシト考
フレ氏其ノ証トスヘキモノナケレハ今可否ヲ定ムル
ヲ得ス

同閏八月田中廉太郎小笠原島ヘ渡航左ノ件々ヲ示談ス
一移民共若小家取建渡之上諸品回復湿気ハ防及保ス
建方之事
一蒸一ヤ暴風津波等方之者場所ハ損一ハ節立退度し
ヲ以ハ堅牢之草屋風除よろしき場所ヘ所建之事
一井戸掘増之事
右ハ生産人共所五ハ内夫ニ力懸り修改方存ス事
一遠方之地商起返等も暫差亜ハ袋焼一体ニ伐尽き先
場南袋修起返一地味的商之諸品他牛食料之余分を

外国人ニ賣渡り樟脳製方之事

一阿部将翁お口将に植物類し内果物生熟し上外国人へも市場ニお渡ニ相成ニ事

一芭蕉布生産お益之織物出来ニ相成ニ事

一移民共懶惰不取締等不生様進退之事

一食塩製方出来り相成ニ可

一正覚坊之甲ところ―き處取集めに戸田之事

一油ニ而絞品穿鑿之事

一魚油絞方之事

一女子共雨具之暇業を様お直之多業工夫之事

但芭蕉布ニ可織糸製一方等之絞ニ子供之仕事ニも可相成ニ存ニ事

一相付ニ薩ヶ半等より燒酎と取ニ相成ニ事

先是八月中阿部将翁江府出途ノ節巣鴨植木屋長太郎ニ

卯之吉ヨリ買上携フ処ノ茶草果竹木等ヲ植ヱ其ノ品目

本密柑九本　雲州密柑九本　九年母九本

養老梅九本　アンス九本　夏水桃九本

前ニ目　柿九本　紅白スモモ九本　本梨子九本

大実林檎九本　大実柘榴九本　葡萄九本

金柑三本　真竹江南竹九本　胡ヶ竹一株

亀甲竹一本　使君子三本　蒲桃三本

椒樹二本　東京肉桂七本

○東京肉桂二本　竜眼肉二本　灌種綿紗二株

黄蓍二本　木香二株　甘草二株

灌種杜沖二本　土伏苓二株　生肖藤二株
長茱萸二本　延胡索二株　銀合歡二本
金合藤二本　巴豆一本　肉豆冠一本
尚ホ
松苗千本　松苗千本　椴木二百本
檜木五百本　つが苗二百本
右ハ後便ニ送リ渡スヿヲ托シ出帆スト云リ

閏八月四日在住セームス病ニ依テ小笠原島ヲ去リ他国ニ轉住セン為メ其ノ所有ノ諸品政府ヘ買上ヲ願フノ旨ヲ出ス

チハ五十二年芳九月廿七日

日本政府役人ヘ

一拙者セームスモイトリー年十九ノ年程生時五ヶ所ニ付気候大変ノ地所ヘ移住い為ン一変然るに拙者病気出生ニ付帰国ニ付き共立退いた め便船有之次第拙者所持之品と日本政府ヘ貴様申 変存ル尤も右便ハ沙千トルラルニ当る 一自然拙者死去い為ン書ケツニサイ後日御取調

計五申事

セームスモイトリー

同月田中廉太郎母島ヘ渡航シ島民チヨームシマツトヘ対談ノ上所差出ノ證書便船次第父島ヘ報シ来ラハ人数ヲ分ツテ母島ヘ渡航スヘシト豫メ其准備ヲナス然シ

父島実功ノ後ト姑ラク此支ヲ止ム

同月小笠原島縣漁ト シテ中浜万次郎ヘ渡航ヲ下令ス其ノ達文左ノ如シ

申渡

江川太郎左衛門手附
浦賀陸役所
中浜萬次郎

右ハ小笠原嶋ヘ異国船数艘来ル時分ニ付右ハ船ヘ為乗組遣ス筈ニ付ては旦ハ右ハ船運賃ハ無ニ漁業仕方其ハ文嶋より
りこ稼民ともへ為ハ教授ハ
ハ写を為の申渡ハ

右之通被仰渡奉畏ハ委細相心得ハ申聞ハ以上

根本惟義

宝八月十四日

古賀名主氏方より出ス

就テハ古勘定所ヘ左ノ書ヲ出ス

手附中浜万次郎ヘ被仰渡ハ
ハ付書

私儀ハ今般小笠原嶋ヘ被差遣ル為ハ漁業ハ仕方ハ文嶋より稼民ともへ教授ハ
ハ為ハ漁業ハ仕法等ハ文ハ文嶋より稼民ともへ教授ハ為ハ被仰渡候ハ
ハ為ハ漁業ハ仕法等ハ文ハ文嶋より稼民ともへ教授ハ為ハ被仰渡候ハ
標ハ位ハ指ハ示ハ乗ハ元来国地四船ハ為ハ出帆ハ修風
才条出ハ乗ハ風標ハ為ハ幾分ハ乗ハ戻ハ破船ハ為ハ
之西洋形ハ船乗ハ方ハ為ハ遠ク破船ハ漁出船ハ

着船可仕候迄て航海中北之へ風波之為に共地形と港
へ迎入に様之義有之に付る西洋形の船之誰も是と依
之出帆者之船と善悪不見定に成第一之に成る者
七八ヶ年前に は製造に相成朱印方君塚形船六番の船之
義八高年に到り水上のみ は修復れ来に まて こて船底
不要にしヶ処手傷差重に由義中に方伺の船へ乗入
に処伺分通公仕旦に小形にて大洋におひて録漁れ来
重に筆に は宮に尤も小筆東崎へ按梅門為僱内らおひ
て移民共へ録漁仕法運搬不教授故に方已と筆に将
に君塚形の船にても差支無に は建に写尚第石川崎にお
いて は修繕有之に由と書面は船見番被仰付は修後出
来の上方 は船にて奈仕は用被仰付に様仕度存に以

上

呈八月

右之通多附中浜万次郎申立に付此度申立に少了可
申候哉は尤古存候

中浜筆次郎

江川太郎左衛門

沛勘定所

多附中浜筆次郎へ被仰渡候に録漁船
は屋と筆同書

私儀以前君塚形二番の船へ乗組小筆東崎へ被差遣録
漁致と仕候之は用被仰付に慶古船に付一小形かて小
筆東崎へ仕僕造と筆に付に差遣者之写安に将共録
漁船へ も迄も は用造小申録漁仕に こに 古君塚形より
大形と船にて 右船より小船とお訳録漁迄去に節に

共話を迂り本船ハ静ニ乎海より糸より鯨魚と弱ヒト
まて何れまても築いたせにか密保敢とはと地小船ニ
てを鯨漁出来重ト仰ニ偉生に共上古は船ハ拓し白木
こてハ製造こハ年孫ニ七八ヶ年を経ハ帝小立ハ出ト
海のとは修復所要なる船底等を信被差重ハ中古作危
きハ船且ハ小取分大体中七条四ト鯨漁し大業ハ成
重中ト我日海幸い我後日平野産業ヶ中ハ国来鯨漁
民業は変化ニヶ四五ヶ年ハ来出府ニハ年中二十
写金と船とを求め器械ともハ出来ハ海鯨漁し実地教授
我変者ニ成日本海ハ生産ニ鯨漁自他西義等旅く吳
人共ハ被棄ハ遺憾共欲ヶ茂祥ニハ依ヶ古船ハ
屋立ハ重ハる私ハ重る被作被ハ前書ニ鯨漁ハ用被作

度ハハ条件ニ若ニも給料毛ニ食料るモハ下ヶ被下
重船貨等を船主ヶりハ下ヶ不ハ鯨漁采暇く時節有
分機ニ若ハ遠近ハ若許ハ分ハ時を為ハ用ハ鈴変
むも船積出走ニ帝ハ用ハ用ハて実ニハ俊復被作
竹ハ標ハ変名廣寄中間ハ依ニハあ申立ハて立

中慎義注印

古ニ通ヶ際中慎寄注印より申立ハ依ハあ申立ハ如
何ヶ申慎ヶ弐ハ下知手伺ハ以立

文久二年戌年八月

陣勘定所

江川太郎左衛門

同九月九日五島廳吏議こう移民ノ方法ヲ定ム

一百姓共十一人ゝ内五郎右衛門右衛門一両人養子仕居申候
用米ゝ五俵物ゝ付年賀使申付分百姓共一同ゝ取作
ともゝ公儀一ヶ月一人ゝ金壱分ヅヽ為扶持被下
ゝ事

一出稼し内木挽職壱人職ゝ為仕事多ゝて出
雇男分ゝ動ゝ付一日壱朱ヅヽ分限扶持米と
して先一ヶ月程し見出ゝて金壱両被下ゝ事

一出稼一日米麦取交食用為致ゝ為右職人ゝ義
八文宛分ゝても米俵ゝ食用致し麦飯致限し扶被
出ゝ付共一斛米麦取交被下ゝ渡りゝ為持ゝ右米
且ゝ食料為分ゝ量ゝ麦ゝ付流儀し以取交扶ゝ為
右ゝ麦俵を焚下ゝゝ分数も右掛昌為右極ゝ節ゝ飯

焚禁一人ゝ付残ゝ預し麦一日ゝ御ゝ同雨天ゝ節ゝ麦
右用晩来罷仰ゝ節ゝ米ゝ用ゝ極仕麦右極ゝ時ゝ出
人数ヶ月ゝ米壱升壱合宛被下ゝ時出麦右ゝ付
増ゝ事

扶方ゝ

一日米五合麦五合ゝて　大工職ゝ付七人
一日米七合麦七合　木挽　七人
分一日米壱升再出預ゝ付出人数ゝ増ゝ
米麦ゝ掛ゝ
一百姓共食料し麦ゝ方多分ゝ食用為致ゝ積りゝ為
袋俵ゝ分遠方ゝ働ゝ為越麦ゝてゝ空腹ゝおよし
難儀仕ゝ可預立ゝ年山稼食用高ゝ試ゝ出ゝ致

下ノ事

一日米三合五夕麦三合五夕ヲ以テ　男女共子供五人れ

一昨年以来お米ノ麦夏中出食ニお米潮湯ヲ以て多入

以多ーノ場ニ腐敗ニおよび食用ニお米重ノ分焼付

ニお米ノ弱百姓ニも中出ノ百代ニ為拾弐人ノ

飢せノ為買文ニ古預出ノ為ノ方ニ費ニも只九米

麦ニ付古方拾貫俵ノ事

右ニ通評議仕

十二月ニ公ノ百姓銘ニ家ニ九米ノ付一日ニ人米

五合麦五合ヲ以一人ニ米三合五夕麦四ノ子供一

人米弐合麦四ノ、拾ーノ方以多ーノ事人数不審ー

国ノ月中田申蔵右ノ母嶋ノ為マリシ

ノ合差出ーノ御書役船方ニ次分父番ノ申来リ

人数ノ分拾島役ノ積リ

同月小笠原島就鯨漁再ニ中浜万次郎ヨリ建言

（以後鯨漁船並ニ鯨漁ノ事ニ付中立ノ書付）

内川右ニ門

我後東野蛮為所持鯨漁船ハ庭立ヲ以申立ノ節水夫

給金並ニ船中使入用被下並ノ立鯨漁家帳ノ節ノ時修繕被下並ノ立鯨漁

仕ノ日も差支ニ付ノ為ノ為ノ為ノ為ノ為ノ

安吉申方ノ付ノ牛ノ時ノ申立ノ為自分庭ノ為運運中ノ

使入用ノ為下御ノ武ニ為ノ為ノ為ノ為ノ為ノ

一右産業所有鯨漁船は産業所有者に共船員は下ふ者
雇に生産物運搬中也水夫給金を外法の用共被
下に係る雇に心得こも一の者之武力も利益他に得勢
鯨漁也与勢こ心為し居たと漁業産業自分者物
運搬を出来産に業雇外産ら産業に
一鯨漁に勿論運用航海に至りに近水業内し共こ生
被作投次分出帆小笠原嶋こおゐて営る者へ被作投
に付用れ勇居来春に至り早こ鯨漁こ出帆可被心得
こ付生に先に得共一ヶ年給こは仕出こ付生の船
奉存に
一鯨漁者之者に船中こおゐて夫こ百挺を鯨漁鯨骨等
を作り帰中之に心得こは生に鯨長也同半より十一

二間位有之長地三挺より三百挺位こは性に付も直
見鯨一挺こ付日より五十又こ付西洋こおいて洋銀
三十一二五枚位こ付生産中に此鯨骨に付用立不申に
生既鯨こに得に一挺こは十五七挺迄此鯨骨に付用
立申に生既鯨油骨共直見鯨と油價位こ付申に
一就令百一く大漁者之に者に一ヶ年こ二三十ヶ得に
者も有之尤も平均こ仕に付一ヶ年十ヶ得に平
漁こ付生に
一産業申上に付給銀こ義是迄商人共より水夫に差
置に商りを以て申上に付も可者之尤に得に夫より
引下ケに得こも付生産中写業者も性こ付鯨漁得に
油骨に付賃払代金を以て分一に付て被下に付生

等と存ぜに付共鰯漁盛と成来りまて〻是迄は信
料は後日筆取申に差支の申に成時は用ひ
て鰯漁始し事ニ付時〻漁事多分者共も取まる以等
水夫賃料引下ケに付〻乗組に成ものも有之百姓と
存ぜに

一鰯漁し時節に春より秋まてこは世に付共ゑと南
海へ乗出し鰯漁仕者ニ向に付ては日か近海より蝦
夷地沖まても乗越申に

中浜萬次郎

右之通名附申候万次郎より申立に付ニ付申上に以
上

戌九月

江川太郎左衛門

水夫給料共外船中諸入用
九百拾九両余
鰯漁盛之不足之分市貫上代金
一金弐百五拾九両余

申候

其方等名附時要請後於中浜万次郎小笠原島ヘ鰯漁
生業為仕用雇使成六人為時船ヘ為乗組差遣ヘ積り申候
金に為出文政後日村松候平野屋義兵衛船は屋立合船
として鰯漁為後に被同為場に付文右仕出帆可致旨万
次郎へ可申渡旨
戌十月廿八日
右川勝丹後守申候

同月中朝陽艦ノ水夫追々ニ死スル者五人各前ニ死者ヲ
埋葬セシ奥村谷川ノ奥ニ埋葬ス

月十月九日五嶋廳吏検地シテ後民ホヘ畑地ヲ割与ノ件
地左ノ如シ

一北袋博昌平屋敷ト本極付ト本来ノ場所
　　反ハ反九十坪ニ畑六反三畝ヨ
一口内次川係シ分十一人ヘ割渡
　　ホ反ホ反ハ反四坪ニ畑七反五畝
一口内降リ地所十一人ヘ割渡
　　ホ反四反坪ニ畑ハ反
一扇浦西ノ山畑屋敷極付ノ米ニ付

同二十六日普西亜人指揮役ションマンシロース同国蒸
気運送船ノ水夫ウサルリムスミツ同船ヲ脱走ス因テ小
笠原島中捜索捕縛ノ依頼且同船中重病ノ者二名快復マ
テノ間上陸加療ノ許可等両條ヲ依頼ス其ノ書如左

ホルトロイドニ於テ千八百六拾二年第十二月十七
日

一拾名指揮役ヲ普西亜アモールコムブ地名附属ニ並
　　気運送船サントトヨトーレンス水夫ト内一人ウサ
ルリムスミツヲ申名ノ月十六日出奔ニ付ホ
ルトロイトノ全権ヘ告知ニ及ビ然ルニ去ル未両尾

　　反四反九拾三坪余ニ畑四反九畝ヨ
　　ノハ反四拾七坪

石鎚丸し役人の助勢をもつて捕拉を船中におみて
怪を又い士官共の多へは臣一被下なお願中に差し
敵對い多一にいつ何様は石計ゆえ捕方をいる
も不苦ト

一重病ゝ者両人船中ゝ者を乗船海岸なるい一の及
薩令ト写拉を達書永保南所へ門後一中を発るい快
服い多一に近は肥下ゝ時差亜被下ゝ為武お内に
以歎願し致は南石ゝ者米に付ゝ薩西亜政府し華ゝ有
之に

責下従者
指揮役
ヒヨンスランロース

ホルトロイトゝ立ル

日本全権へ

就右小花作之助直子ゝ許可ノ旨ヲ送ル

ホルトロイトゝ於テ多八る六十二年第十二月十七日
ヒヨスランロース君

一其許芳意者の書簡慈多いる一に出案人と後を了第
丈探索不致に

一病人の儀ハ南島五位ゝ者のゝ中ゝて引渡石ゝの者
ゝ付いつ位者ゝ多ハ差許す中に

小花作之助

同二十九日五島廳吏検地ノ上コルリンス君宅ヨリ奥村

ノ方降浜ノ地ヲ貸与ヘ開拓サセシム其ノ証書

於無人島子八百六十二年第十二月二十日

一私儀又セーレンビーラニ有之ニ地面一ヶ所日本政府

より拝借仕ト雖ト遠望は他ニ古は下用之節ハ返上

可仕ト

ミヨーヒフマルリヒス

日十一月十九日先是中浜万次郎鯨漁中心得ノ付書ヲ出

又本日指揮ノ令有リ

私多陸中候百ヒ度は庶上鯨漁船ヘ

乗組小笠原嶋ヘ被差出ハ心得

可申ニ付書生

今般被仰出村松候平野屋所持船は庶上ヶ右ニて鯨漁

る被ト候私乗組小笠原嶋ヘ被差出ニ付心得可申ニ付右

ニ申上ト

一平野屋所持船は庶上ヶ私乗組彼作鯨漁として

小笠原嶋ヘ被差出候は安所へは産物買ニ使

物ニ付鯨帳被渡下ニ標仕交可申ニ

一出帆候自然遭難風波ニ船破板等出来ニ節ハ其景寄

被金至後尾ヘ外博船拵と上代僕差加ヘ印標仕交代

るハ為ニ用金は陸之分ハ仕交可申ニ

但本船ニ外買上物等多ニ出来は陸ニ用之ニ

不足ハ多ー代僕出来ニ節ハ押ニは代金私欲

ハ領主ヘ金公五金と上ヶ用後ニ外百個ニ住場所

より申上は差図支代僕差加ヘニ標仕交可申ニ

一位梅おおの乗組ヘ病死ハ有之ニ節ハ最寄ヘ船

京畿を商事院へ提携致し大洋中におゐて
死亡致之に節は地位改新に相当の仕方為
一地方近にて捕漁なし人に付は其業務に入津鯨肉は
入れし上製油骨等を商相成りに相仕方為
但又札製制かし成は料は代金私領は領主地
限へ相合立合ものへ夫に始始未成存し上申立
は相当仕方為
一条位り為人又は怪我人有之地方近に付は最寄
港へ入港上陸養生差地へ立寄は為に御は商と
旅篭式に取り相当為
一安政四年度寄君好形成船へ私家組小笠原時最寄
へ為鯨捕取致に節は製作は従れ先に鯨漁道具商
内に清国軍艦方に領に分内商へ品達に立私へ相借被作
付り相当為
一鯨漁ハウライラ式艘形船は出立は後に出集に相仕
為古は商地に或水相出の相当高並係に出船間際
こも有之為の出集は伊豆を御確係に場所に御
出立に相仕為船に立に出立は入用金は下に後に相
下に
一鯨油差入に油搾出る樽は買上は後れ成方に相仕方
為なに
一臺所船へ医師一人為乗組方為に
中濱万次郎
右に通申附中濱万次郎申立に付此申立に付此

南部定所

書面九ヶ條之内建之家ハ今義お医師お来伯お家ハ親
及ひ拾名餘同し通れるへくに
成十一月十九日

明四年樽之義ハ用意金之内ニて買上し積り

同三年八清月治二年庚午千百六十三年正月七日移民及ヒ出稼職人ホノ
休暇ヶ改正

一百姓共家作年中ハ家畑之外品ヶ反極めも堂ヶに
付夫ニ申付家堅方仕事共お段男お に故一ヶ月し内
六日休息日申度亦に指出暑子お他お も銘ヶ へお恢
苟付気候し後急耕他し多故ハも可ある に ヶ休息
と差定に差ハお止に事
一出稼大工木挽鍛冶方共是まて茶屋休息お段に指
共雨天等ニる毎日お休に義も多し故ハ向六日と
休ハて ハ休事も ふ指反に ヶ以来ハ朝ヶ十五ヶ二十
八日三ヶ日と休息日ニ弱ーに事
右之通取極夫ヶ ヘ申候

同月九日平野船鯨漁トシテ船長中浜萬次郎乗組着港滞
船鯨漁ス林和一郎松浪権之丞モ同船シテ出行ヶリ此時
小笠原島乾ノ方ニ一小島アルニ至ル全島總テ岩山頗険

阻更ニ平坦ノ地ナレ島中藤九郎島群レテ人ヲ恐レス鞭ニテ討拂ヒ行程ニ集リ居ルトエフ各上陸シテ左ノ商札ヲ建帰レリ此頃鯨魚二尾ヲ獲タリ

船長
中浜万次郎

大日本鳥島
鳥島
文久三癸亥三月二十四日
改建之
松浪権之丞
林和一郎

但シ木品ハ六分板ニハ癸ヘニ
板赤三枚ニテ差立用意ニテ持参
致度度

同月二十一日去年十月十日小笠原島ニ於テ左島人ウサ
ルエムギルリー暗殺セラルヽノ旨ヲ訴フニ依リ直ニ其
ノ殺人心当リ探索ヲ命ストヽ元因循トテ答ヲ為サス
数催促ニ及ヒ結局本日於平野船一同呼出シ相糺ス所左
ノ昏ヲ差出ス

於毎人島第十一月廿六日

一ウサルエムギルリー義廿六日夜何者の所業ともふ
お分刺傷致され廿七日死去仕候ニ付廿八日埋葬
仕候義お違ひ無御座候右ニ付私共逐一吟味仕候ニ
ヨンケン子、トーマスス両人ヲ内ニ召寄ス
ヒヨーチホーワン
ナスアエールセーヨリー
トーマスエツチウエウ

為證橋一日記其仕ル

シヨニフテウヨー

同三月十九日亜国ノ鯨漁船乗組ノ水夫脱走ルニ及ニテ
船長ヨリ其ノ者捕縛及ビ罰罪請求ノ旨ヲ小笠原島役廳
ヘ差出ス

於ボルトロイト弁八百六十三年第五月ヨリ

ホルトロイトホルる

日本全権員下

君

一シーエッチデ井ス、ビヨーリビエムステーブルス発
ニアルヘルドルアイムスと申三人の水夫私指揮ル

ヒヨニフテウヨー

為ルドエヒギル船名より出奔シ為シ二付吉し者共
捕召捕三ヶ月之間厳重ニ申生ル罰被下度お願
ル右ハ私商売再度ニ節外ル支障ニ成ても為ニ申ル
味職務ニ有之ル写右願仕ル

奏下ニ茶徳者

亜米利加合衆国之内
ニウベトウラルト地名仕出之
エビギル船名長
エベンチエフナイ

同月中前ニ亜国鯨漁船ヨリ訴出シ三人ノ水夫等自首ス
仍テ一通リ調問ヲ加フルニ其ノ根原ハ士官ノ苛酷ニ出

ルヲ以テ法ヲ敗ルハ其船法ニ對シ不粗度トイヘトモ
皇国ニ罪アル者ナラ子ハ以後ヲ説諭シ船邑カ所請ノ罰
罪ヲ免シ島中滞在ヲ許シ兼テ所定ノ規則ヲ読渡シ請書
ヲ為サシム

ホルトロイトニ於テ子ハ百六十三年第五月

一私共儀エヒキル船附属ト水夫ニ者ニハ毎士変ヒモ
のとも取扱不申日船ヒリ出発致シ日本全権ヘ巨細
自伺致ハ筆ハ遠望ハ珍ヲ海船長ナイヒリ法
ニなき三ヶ月の間日本人ヒ為ニ厳重シ業ヲ致ハ戒
放下ハ様以書面申残置ハ将共ハ仁恵ヒ以テハ免シ
お次第有之ハ為ハ上ハ南島者前中西洋人ニ関係
ヒ一商度教則お守ハ申ハ

同五月朔日同島退帆林和一郎松浪権之丞阿部将翁等乗
組帰府ス

エドモンド・ユムテウ井ス
ジーエッナステーフルス
アルベルトルアイムス

同九日朝陽艦三度小笠原島ヘ着港ス先是去年八月二十
一日三郎島津久光（後任大隅守叙従二位）勅使護送ノ駅路東海道節
武州生麦村ニテ女徒士等英人ノ無礼ヲ怒リ斬殺ス是カ
為応接教田逐ニ英国ヨリ教艘ノ軍艦ヲ差渡シ公使聚リ
ニ償金ノ論ヲ主張シ支機ニ依リ兵端ヲモ開クヘキノ景

況ニ至リ既ニ変情迫切ニ及ヒシカハ長崎箱館ホヘモ令ヲ下シ専ラ兵備ヲ厳ニシ海防ノ准備ヲナサシム此時ニ当リ各国雑居ノ離島ヘ僅ノ人員ニテ官吏ヲ置且ツ移民ヲ其侭ニ居ラシムルハ釜中ニ魚ヲ放ツニ似タリ加之開遠ノ孤島開拓モ容易ナラストノ議論サヘ起レリ是ハ小笠原島再ヒ開拓ノ議ハ安藤信行ノ主張セシ所ニテ専ラ其変ヲ裁判スル然ルニ去年四月信行カ職ヲ罷尚ホ十二月ニ至リ前掃部頭井伊直弼カ領知ノ内十万石ヲ減シ紀伊守内藤信親カ所領村晋旧地ニ復シ下総守間部詮勝カ所領一万石ヲ減シ隠居謹慎若狭守酒井忠義相模守堀田正篤及ヒ信行等共ニ蟄居正篤ハ所領一万石信行ハ二万石ヲ減スルノ厳令アリ如此柳営ノ處分掌ヲ反スル如シ人権勢アル時ハ人争之ニ諂媚シ一言半句ノ誹難スルモノナリ権勢ナキ時ハ忽チ善変モ悪シクリ難論スルハ浇季ノ人情百変彼徒ノ指揮セシ丁ハ議論アル半ナレハ小笠原島ノ開拓ハ無益有損也ト評判喋々旁ル時モ早引戻スヘシト令シ直ニ艦ヒテ品川海ヲ出帆航海本日父島ノ港ニ入帰府ノ令ヲ傳フ忽卒帰府ノ准備ヲナシ移民等ニモ引纏メ先扇浦ノ廳舎及ヒ其他在番諸吏ノ邸宅ヲモ在住ノ島民ヘ分与フ部屋四房一棟長六間梁間二間半ヲセーホレヘ元役所三間ニ二間半一棟物置一棟並ニクヒ船一艘共ニウヘヘヘ應接所三間ニ二間半一棟フラホーヘ斉藤源蔵住宅二間半二間一棟コルリンスヘ山添大物置七間ニ三間一棟海岸在来物置一棟共ニレッワヘ平野家三間四

方ノ一棟フラホー忰ヘ医師宅二間半ニ一間一棟奥村ナルレヤークヘ兼太郎居住二間四方スミスヘ円人火焚所ショージヘ板屋百姓家三間半ニ二間ヲフラホー二男ヘ外出稼小家鍛冶方小屋物置臺所等五棟境浦ナルゼヨーセフ奥村ノセヨーラヒジヨ、ペハー、シヨンカナカ人チヤレ等ヘ与ヘ其他大形押送船ニ舶舩共帆モ父島セーボレウエフ、ブラホー以上三名ヘ与ヘ小形ノ漁舩舶及ヒ舩具ヲ添但帆ヲ具セス是ハ母島マツレヘ前三名ヨリ伝ヘ与フベキ旨ヲ托シ最前平野船ヨリ買上置シ古ホート船一艘ヲモ同三名ヘ与フ且米麥合テ二百俵程大豆五十苞小豆十苞水油ハ樽其外庖厨ノ諸器具等ハ夫々分配スヘシト建シ分配方男一人ノ分配高ノ半減ヲ女子小童男女ニ至ルマテ人員悉皆ニ分与勿論也ト説諭シ尚ホ昨年八月中セームスマツレヨリ所取置ノ證書ノ横文ハセーホレヘ托シ序ニ返シ与フベキ旨ヲモ談シ植付草木培養オハ懇ニ遺托スル左ノ保状ヲ出サシム

於二見澄まハる六十三年第六月廿七日

一私儀利益ヒため扇庵ニおゐて地面一ヶ所相渡仕ル

爰ハ遺愛の世ニ以後日幸政府ヨリ問答ニ及ヒ

費御申答者ト

ルーイスレツロー

於二見澄子ハる六十三年第六月廿七日

一日本全権ヨリ私共ヘ建家食料ヲ外高島ヘ残ーて

おゐ諸品被下置候ニ付厚載仕ル破船ハ多ーヌ及

雜況ハ日本人ハ全ク国ヘ便船ヲ乏シト雖モ事扶助ノ
仕ハ且ツ石碑ハ日本義ニ墓処ガ無ク之ヲ加ヘ大切ニ
当護ノ任ハ

此眉島民連署ナルヘケレト小花カ筆記中署ヲ脱ス然
ルニ前ニ載スル所ノ眉中私共ヘ建家食料其ノ外当島
ニ御残ニ相成候諸品被下置慥ニ頂戴仕候云々ト見ヘ
タレハ一名ノ眉ナラスハ論ヲ俟ストイヘトモ其名ヲ
知ルニ准拠ナケレハ姑ク原本ニ隨テ交名ヲ記シ載セ
ス

遠ノ退去煩ル煩雑ヲ極ムトイヘトモ兼テ島中処置ノ支
件未タ裁判ヲ為サヽルモアルヲ多忙ニ紛レ未タ捨出発ス
ヘキナラネハ夫々処分ヲ決メ裁判ス其中ニ元アルミル
リンチヤムヘ附属スル処ノ地所トーマス エッチ ウ
ブヘ譲与ヘシ旨ヲ訴ヘ出タリシテ未タ許可ノ証眉ヲ授ク
与サヽリシカハ此時左ノ証眉ヲ授ク

於ニ見澄ムハる与十三年第六月廿七日
元アルミルリンチヤムヘ属シ下地所トーマス エッチ
ウヘッヘ譲受ケ持地ニ付遠堂ニ伝ニ拙者記名致ス

二見澄ニ於テ
日本全権
小花作之助

去年八月江府ヨリノ下知ニヨッテ田中廉太郎立合セー
ムスマッレシヨリ證眉對照ノ上横文ヲ取置シカトモ今
般在勤一円引払ノ台命アルニ因テ官廳ニ預リ置シ本眉

ヲ交還スヘシトゼームスマッレヲ徴出シ席ヲ次テ本人マワレシヘ其ノ旨ヲ伝達シ返シ与フヘシト演達シ左ノ翻譯文ノ原骨横文リゼームスニ委托ス

文八月六十三年 第九月廿七日

日本政府役人ハ

拐去セームスマッレシ義十九ヶ年程五島五ト称ス

慶応年疾病ハ感ニ生気候ハ変ハ地所ヘ移住ハ為ー

変就ハ拐去元ト附属ト者共立退ハ為め便船者之次

第拐去所物ト品ニ日本政府ヘ賣拂申答ハ尤ト古價

ニ多トルラルニ方之ハ

自然拐者死去ハ為ー ハ

この中ハ

書ケッテ井ー手ロ修正計

セームスマッレシ

總テ移民共ノ開拓スル地既ニ八千坪ニ及ヘリ是モ実在

島外国人ニ委ネ度全ク整ヒ小花作之助益田鷹之助原文

吉堀一郎及ヒ八丈島ヨリノ移民男女トモ引払ノ准備遠

ノ度ニテ百度忽卒也トイヘドモ漸調度ヲ取揃ヘ同十三

日第十二時小笠原島出帆同十九日朝八時浦賀着港翌廿

日帰府ス

同七月伊豫守菊池隆吉稟状ヲ捧ケテ小花益田松浪ノ三

士及ヒ産医師阿部将翁等カ賞典ヲ請フ

小笠原移住民拐勇ヨリ互第

仕ハ其ハ裏表有願ハ書牛

菊池伊豫守

支配定役元〆

小花作之助

同役元〆助

益田蕃之助

同同心

杉浪橋之丞

右之者等去る酉年十二月小野下総守服部長門守伊豆国隠島と内偽白砂調且つ小笠原嶋内開拓出用被仰付候節品々船海中絶入為小笠原之析柄死生難斗候と雖無若小笠原嶋へ舊人一人而険阻不大戚険山荊棘跋渉野宿

等仕立島外出人もふ立入場と迚も罷越全嶋見分百調如等拙者に付書面を以共出張拓勤厚相と一て差残置去春中下総守外女配白と者一同取存仕候旨右迚帰りに女配白へ前書を渡と亜米利加国へ罷越に出用と刀とり早苦迚と申れ場合を以て出襲撃と義下総守長門守より申上候年中文と出襲撃被下置に義に有之然る海書面を者共を前書功労有之に立作に絶場と孤島へ去渡出実拓白砂計出国威又失様立島外出人共とも審迚以為一旦つ去る戌八月中八丈嶋より差渡に移民先と出様人とも差配仕吾小屋取建方と始め畑切開等蕃を外培養方新規織物試迚と小船出建ともに為仕今般一〆出出多門外取に共南嶋永住と農外取く

心然れ動一昨年より病勢漸て三ヶ年戒廉衰ふ自由と
艱苦ふ為ふ厥孤為左動仕ふ旺不突為辛勤ニ生出候之内
癘等程不堪ふ様仕為等相ふ保之山内等預ふ
改羅巴法ふ入ル砲ふ支配室役之ノ助ハ内癘等とも
金ふ於而一生と内ふ扶持方三人扶持日室役ハ金拾
五両ふ扶持方五人扶持日室役ハ金拾
五両ふ扶持方三人扶持日ハ金於而ふ内ふ扶持
力ふ人扶持遣下之ふ
以上
亥七月
下ヶ札

去る戌十一月ふ文化室役之ノ助と
り日元ノ書之助長ふ日室役とり日元ノ助組作ふ

小笠原唯一ヶ年間ふ長崎ふ於ふ蘭医師
ふ長崎奉行ふ書生
菓 肥伊藤寺
ふ長崎医師
阿部将翁

吉と為夢去隆為祀調役田中屋左郎八丈為と為桜氏出
様人ふ撰小笠原唯一ハ医術ふ於ふ名高ふ
花ニ累年病流行ス折柳別ふ骨ふ医療致ル一人丈島
ニ一ヶ月逗留中元来長医師ふ小地ハ年来煩居ふ付
病療作致ふ付ふ夫ニ施策致ル一遣ル生徒小笠原島ハ
ふ度左動役と稼氏出様人ふ不快と帰ふ向ふ偏左嗚ふ周
人病気ふて生ふ用ふ当仕生ふ益ふ為ふ学ふ業ふ之ふ
ニ付南嶋ニ長ニ樹木ふ栽培養ふ当仕新規物試

遠と雖も同人の心情を察し此に為一筆お願申上げ
候心持一ヶ年し乃不自由艱苦の為仕ふと仕水
野下僚当一日祝宴に寄合の医師莫敵迄領小野孝庵へ
も為時療養金弐枚時候二の枚下に乃将翁等此分も遠
方の見合こハお朱盃に付ても事実に於て和切艱苦を
孝庵とりもお摺場者に等こ付方向と時寒多枚下盃に
極仕文等及に依之心に乃手数に此上

文六月

同十一月下野守竹内保徳伊豫守菊池隆吉連署ニテ小笠
原島開拓費用ノ残金未筆当決セスト仁ニ先金蔵ヘ返
納セトヲ請フ

小笠原島の開拓費用に付諸藩に用
意金弐千洋銀寸上納し筆申上に責任

竹内下野守
菊池伊豫守

諸藩に分配ニ洋銀ヲ以
壱万弐千三百五拾弐両弐分永百八拾三文
一金六千三百拾壱両永弐百九文　山交上納可致方
外金五千九百九拾四両弐分永百五十四文
諸藩に分配ニ洋銀と乃替に分共
高洋銀七万八千三拾六枚半
一洋銀七万三千五拾一枚　三十四セント　山交上納可致方
外洋銀四千九百八十五枚　十六セント
依て入用を拝借ニ
後ち相償し分共

依て入用を拝借ニ
後ち高相償し分共

古来小笠原島の開拓の用に付先般水野下僚守服部長
門守ニ成に節　用立金として諸藩ニ貸　内米麦等外諸品
の買上代銀ニ夫成八月中八丈島ヨリ移民銀ニ出稼大
工木挽職ずも此差後ニ節　依て手高族用立ニ家具農

長州征家先祖代代伝来品ハ買上代旦ハ帳年来於小笠原嶋左
為ト設ケ置ク右拾ハ外ニ人一般下品ハ買上代度貨幣
ヲ以テ弗ハ海浜ヲ右等ノ屋ト巨細内部陳列ス右構中立
ハ穢リ立テ易ク右調方モ出来高ハ毎日拾ト冷立ニテ
右書類ハ悉焼失仕ハ今日ハ拾ト調方ハ直ニ取仕ハ特ニ
一時急速ニ伝ヘ方ハ蓋シ特ハ如立又陸海一般ニハ
役ニ内陸船等ハ拾ハ中ドンウン通用ト出地船ト鶴
方ト差支ハ今一時標ハ拾ハ仕ハ分モ方ト右兵庫
奇怪ト直納方ハ達ハ拾ハ皆ト為ハ如何ハ思内ト連
ハ外ハ特別高價ハ島ト為ル雑船仕ハ立船ト
俗ト者トモ直納方ハ如ハ拾ル毎右ト外ハ如
リ右ハ金庫鉦トモ書面ト通ル達三井ハ於右情

門方ハ頭金ハ特共ハ拾ハ人宅焼失仕メリ手落ト場所
ハ差金ハモハ拾ハ柄無ト為シ申出ルモト次第トモハ写
ヲ構ハ巨細内容帳ト為ハ取調出来次第ハ申立ハ特共
書面ト金高ハ節ハ金庫ハ納仕交ハ勘定有リ
被仰付可被下ハ後之ハ申立ハ以上

去十一月

同月十五日酉ノ刻前江城本丸潮見坂番所後留守居番部
屋服飯方詰所ヨリ出火本丸及ヒ二丸
時ニ火移猛火焔々消防ノ術無ク大将軍モ吹上ハ動出度
急ニシテ奥向ノ宝物重器ヲ始調度雑品多クハ灰燼ニ属
シ中ニモ惜ムヘキハ諸有司ノ各局ニ備置ケル古今ノ信
文内外ノ記録往復ノ書簡ノ諸吏退散ノ後僅ニ宿

衛ノ者而已火焔ヲ潛リ烟ヲ呑ミ千辛万苦持出スモノ若干也ト雖モ尽クスン間ナリ祝融ニ罹ルモ斯カラス小笠原島ニ関係ノ書類ハ一葉半紙モ残ルモノナリ食鳥有トハナクシテ也小笠原島開拓再与ノ台命アリテ其ノ支務ニ関ル者ハ南島掛ト唱ヘ一課ヲナシ彼島岸ニ係ル支件ハ内外ノ往復ヲ始メ大小ノ支務尽ク南島掛ニテ取裁スルヲ以テ各国公使領支等トノ往復書翰取扱記及ヒ書翰留等モ別冊トナシ外国支務平常ノ記録ト合綴セサリシカハ今小笠原島支件ノ書類ノ傳ハラサルハ此火ノ災ニ因テ也柳江城祝融ノ災厄ナル亡本西両城統テ十一度當城基立ノ権輿ヲ溫ルニ

後花園天皇ノ長禄元年（明天順元年 洋書平七年）鎌倉ノ管領修理大夫上杉定政カ長臣左工門大夫太田持資入道道灌創テ築城以後連綿今ノ東京城則是也先是道灌ハ当国荏原郡品川ノ館ニ在シカ此頃関東辮ノ如ク乱シ下総ニハ下野守東常縁兵ヲ起シ陸奥入道馬加光胤ヲ討伐セント馬加ノ城ヲ攻メ上総ニハ武田入道兵ヲ挙ケ厩南鞠谷ノ両城ヲ経営シ楯籠テ国中ニ押領ス安房ニハ刑部少輔里見義実中村ノ城ニ在テ隣国騒擾ノ虚ヲ窺ヒ国境ニ兵ヲ出シ所々ヲ侵害ス築田河内守ハ関宿ヨリ討出武州足立郡過半ヲ所領トシ市川ノ城ヲ乗取リ兵ヲ篭置尚ホ近境ノ形勢ヲ覬覦ス上杉方ニモ三浦介義国ハ本貫三浦ヨリ起テ相模国岡崎ノ城ヲ取リテ近郷数ヶ所ニ押領シ大森安房ハ竹ノ下ヨリ起リ小田原ノ城ヲ取立足柄郡ノ地ヲ畧ス又タ

武州ニテハ上杉武蔵入道性順其ノ男右馬助房憲父子人見ヘ討出上杉ノ味方ト謀シ合セ深谷ニ城ヲ築シカハ左馬頭成氏之ヲ聞驚愕大変也敵ニ足ヲ溜サスヘカラスト鳥山右京亮高山因幡守等ヲ先鋒トシテ出張サセシム上杉方モ勢ヲ囲部原ヘ繰出シ烈シク闘戦ニ及セシカトモ遂ニ上杉方敗レ井草左エ門尉ヲ始久下秋元ノ人々其他ノ逆兵残ス十二討ナサレ成氏方モ軍ニハ勝タレトモ大将鳥山モ深手ヲ負ヒ乱軍ニ討死シケレハ軍ハ是迄也ト引返ス上杉方ハ新田岩松小五郎金井新左エ門以下新手加リ再度ノ合戦ニハ成氏ノ軍敗北足立ノ郡ヘ引返ス如此両野房總武相ノ六国一時ニ修羅ノ衢トナリ何時不震ノ変アラントモ計リ難シト修理大夫上杉持朝入道ハ武州入間郡川越ニ城ヲ築キ道灌カ父備中守資清入道道真ハ同国埼玉郡岩槻ニ城墨ヲ営ミシカハ同時道灌モ豊嶋郡江戸ニ城地ヲ開キ康正二年経営ニ係リ翌長禄元年四月ニ至リ落成此時河越岩槻両城モ全ク成功シタリケレ鎌倉大双紙ニ同時築城ノ事載タルヲ以テ知ルニ足レリ却説道灌ハ新築ノ江戸城ニ移リ此ニ居ル事三十年城中ニ然居ノ室ヲ造営シ南軒ヲ静勝ト号ク東軒ヲ泊船ト呼ヒ西軒ヲ含雪ト称フ道灌ハ文武倶ニ長シ志モ優美ク和歌ヲ善ク詠タリ家ノ集ヲ慕景集ト号ク斯文芸ヲ好ムヲ以テ万里居士ヲ江戸ノ城ニ招キ入居士山水ノ眺望ヲ称揚シ怠倉西嶺千秋雪門繋東吳万里舟ト古人ノ詩ヲ引其ノ義景ハ江亭記中ニ見エタリ此年間扇ヶ谷ノ上杉定政

山ノ内ノ兵部少輔上杉房顕互ニ権ヲ争ヒ間計ヲ以テ定
政ニ道灌ヲ疑ハシム定政思慮萬ノ其ノ間計ニ陷リ人ヲ
シテ道灌ヲ浴室ニ刺シム是文明十八年其ノ後定政カ子
冨氏五郎朝長冨修理大夫朝与共ニ相続キテ江戸城ニ居
リ専ラ隣国ニ窺ハシトスルヲ守リシカトモ
後柏原天皇ノ大永四年明嘉靖三年洋千五百二十四年正月十三日左京大夫
北條氏綱カ為ニ落城シ朝与ハ川越ニ敗走ス自是後ハ氏
綱カ冨永神四郎遠山四郎左エ門ガ城代トシテ此ニ居
シム氏綱カ男左京大夫氏康其ノ男左京大夫氏政其ノ
男左京太夫氏直ニ至ルマテ四代ノ間ハ北條家ノ持城タ
リ此間遠山冨永両家守リ居タリシカ
正親町天皇ノ永禄七年明嘉靖四十三年洋千五百六十四年太田新六郎康資
兄弟小田原ニ殺キ冨苗美濃守資正入道三楽斎ニ謀シ合
セ安房守里見義弘ト冨シ下総国市川ノ城ニ楯篭リシカ
ハ北条ヨリノ討手トシテ遠山丹波守冨永三郎左エ門北
總国府豊ニ向ヘ進軍其ノ国ヲ失ヒ却テ敵ノ計策ニ陷リ
二人共ニ討死スベシトモ氏康父子小田原ヨリ馳来リ大
ニ闘戰シ三楽斎義弘敗シ北條ノ軍勝タリシカハ江戸ノ城
ハ異ルフナリ小田原ヨリ之ヲ守リ北条治部亟遠山左エ
門等城代ヲ勤ム
後陽成天皇ノ天正十八年明萬暦十八年洋千五百九十年豊臣太閤兵ヲ出
シ北條カ居城小田原ヲ攻ム此時遠山左エ門佐景政ハ小
田原ニ篭城シ其ノ弟河村兵部少輔冨遠山丹波守江戸
城ヲ守リ居シカトモ北條家波落シ関東入ヲ国ヲ徳川氏

ノ所領ニ与ヘラレ江戸ヲ居城ト定メ同年八月朔日入城
アリシ也支流合考ヲ考フルニ江戸ハ海端ノ汐入田畑ナ
トハ僅ニヲ凡ソ八百石許ノ費也ト家康平日ニ自負セラ
レシト見エ岩淵夜話別集ニモ此ノフリ記セリ友人旧幕
臣伴直剛カ家藏ニ享禄年間江戸城ノ古板アリ何者カ天
保ノ末此図ニ些作意ヲ加ヘ長禄江戸図トスルモノハ微
トスルニ足ラネト直剛カ藏スル古板ハ江戸城ノ往昔ヲ
見ルニ足レリトスヘシ其況マテハ市街トテモ備ハラス
田辺原野渺茫村落疎也天正文図以後日ヲ重ネ月ヲ追ヒ
天下ノ諸侯此ニ参勤シ藩邸堯ヲ並ヘ市廛ノ家屋鱗差シ
ラ縱横ノ四街八百町斯ノ繁昌ノ地トナルニ従ヒ柳営ノ
殿舎漸々ニ造営セラレシ本丸二丸三丸西城等大厦高堂陸
続ト建列リ

明正天皇ノ寛永十一年明崇禎七年洋千六百三十四年閏七月廿三日軒遇突
智ノ神ノ荒暴アリテ本城火ノ災ニ灰燼トナレリ長禄元
年当城創築ヨリ此年マテ百三十四年ノ間祝融ハ有毎ッ
記録スルモノ毎レハ詳ナラネト入城以後四十五年ノ間
ニ火ノ災ナカリシハ雖也然ルニ僅ニ年ノ後同十六年八
月十八日又火アリ夫ヨリ十九年ヲ過
後　ノ明暦三年明永暦十一年洋千六百五十七年正月十八日本郷丸
山本妙寺坂辺ヨリ出火此火ノ為メニ本城尼災ニ罹リ又
九十年ノ後
櫻町天皇ノ延享四年清乾隆九年洋千七百四十四年今年五月
皇太子ニ御譲位アラセラレシ

桃園天皇御代ニ知レ食シカトモ未タ御位譲ヨリ以前四月十二日西城ニ火アリ其ノ後九十五年ヲ隔テ仁孝天皇ノ天保九年清道光十八年洋千八百三十八年三月十日西城又祝融ノ災アリシヨリ七年ノ後同御宇ノ弘化元年清道光二十四年洋千八百四十四年五月十日本城火災ニ罹リ九年ノ後ム孝明天皇ノ嘉永五年清咸豐二年洋千八百五十二年五月廿二日西城ニ火アリテ殿舎灰燼同十一月廿八日富士見宝蔵出火シ又タ八年ノ間ハ然ル災モ無カリシカ同御宇ノ安政六年清咸豐九年洋千八百五十九年十月十七日本城中ノ口ノ辺ヨリ出火シ矣鳥有トナリ又五年ノ後則本年文久三年六月三日芝飯倉五町目辺ヨリ出火其ノ火飛テ西城ヲ焼キ六ケ月ノ後今度ノ本城ノ祝融ニ至リ本西ノ二城二九サヘニ焼シカハ一先清水ノ館ニ入ラレ同十一月廿六日田安ノ屋敷ニ滞坐アリシ也

元治元年清同治二年洋千八百六十四年ニ至リ再ヒ外国奉行連署ヨリ建言ス

南海小笠原嶋ハ友邦向シ
多ニ付中上ル書付

小笠原嶋ヲ開ク事

小笠原嶋ヲ去ル四年十二月中小野鉄次郎ハ同伴
復命帰一オ以来閣老ヲ始メ諸公使ヘモ受合ハ
閣老ヲ始メ亜英仏度オヨリ同島開国ヲ申出ル
申出ル事方ヲ以テ拒ハ実相ニ於ケル事
ニテ先鞭ヲ被ル為ニ諸ニ於テ開港ノ五分ヲ弱ハ在ル事

為絶ル所の申立辞柄も無之候処此止仕に事に方之将前
書両人帰帆之節　女死白花之所に付人員附ず
日為取鎮りと為差遣し　重役ハ従所花之石碑ず為建
候ハ丈民ともハ為し　ハ米国女死之事ハ代重江川
太郎左衛門へ被仰付候人員附子代之内にて為れ供に
相被仰渡ハ筋と毎此度年四月中東海道所生麦かこ
ゐて薩摩三位供方と英人と殺傷仕る一条こ付日国
とり数艘之軍艦差候ハ公使より償金之要強て申立事
様とより兵端ともあ間きに成し累況こ為ハ益急
不ず　扨遂に　日為互動と以下脱ス
可惜此昏未本ヲ脱ス他日捜索こう補と加フヘシ